

DV加害者カウンセリング 及び加害相談者支援のあり方

オフィスよしおかカウンセリングルーム 代表 吉岡俊介

地方自治体を中心とする男性の悩み相談に関わり、男性たちにとって、自分の悩みを他者に相談することのハードルがいかに高いものであるかを実感します。本題に入るまで暫く時間がかかる。本音に蓋をしまい、建て前を優先するために、自分の気持ちを相手にうまく伝えることができない。「男は黙って」という旧来の男らしさの鎧を身に着けたひとほど自身の感情を自分の言葉で語ることが不得手という傾向が見られます。

そのような男性たちが、自分の暴力のことで相談窓口や私のカウンセリングルームに来られます。その多くは、妻に対するDV（ドメスティックバイオレンス）を何とかしたいという問題意識をもって来られるのですが、中には「警察に言われて」「妻に言われて」「仕方なく来た」というひともあります。

DVについては「加害者は変わらないのか」という質問がよく寄せられます。自分の暴力をやめる必要性を感じないで居直るひとは変わりません。でも自分の暴力に真摯に向き合い、非暴力に向けて真剣に取り組むひとは、時間はかかりますが徐々に変わります。往々にして質問に加害者を「変えられないのか」「変えて欲しい」という意図が込められていることがありますが、「DV加害者を他人が変えることは難しいが、加害者自身が変わることはできる」と説明しています。

DV加害者から相談を受ける際の支援者としての主な留意点は次の通り。①暴力は容認できないという毅然とした姿勢。暴力は犯罪であり被害者の存在を忘れてはならない。②相談をしてきた加害者の動機と人格を尊重する。③暴力をふるった心境に同調せず、罪の意識や辛い気持ちに共感する。④説教や処罰ではなく悩みを受け止める。⑤被害者に関わる情報は絶対に提供しない。⑥ジェンダー（社会的、文化的に形成された男女の性差）に関わる問題の理解。

上下関係の「力と支配」（パワー&コントロール）の価値観（タテ型価値観）をしっかりと身に着けた加害者については、抑圧を加えて更生を促す方法が効果的とする支援者もいますが、私の経験では、男の鎧を身に着け、他者の目を気にする男性たちは抑圧を加えるほど「建て前の良いひと」を演じ、自己変容につながりにくい傾向があるようです。まずは男の鎧を解きほぐすために、封じ込めてしまった本音の蓋をはずす心理的アプローチが求められます。そのため基本的な対応は「傾聴」することです。

どこへ行っても加害者扱いで誰も自分の言い分を聴いてくれない、助けてくれないという追い詰められた気持ちを受け止めます。支援者の受容的姿勢は加害者に自分の感情をそのまま表現してもよい、本音を吐き出してもよいという実感を促します。感情の言語化は自分の思いを意識化し、混乱した気持ちを落ち着かせます。それは自分に寄り添い自身を見つめ直す作業です。その感情を支援者がしっかりと受け止めることは、加害者が自暴自棄になって暴力を再発させることへの抑止につながります。

私が接する加害者には、「気に入らない相手は罰する」「やられたらやり返す」という報復感情を強く抱いている者が多く見られます。そういう彼らの価値観にはない受容、寄り添いの体験（ヨコ型価値観）を通して、他者を受容し、他者に寄り添う力を徐々に身に付けていきます。それは被害者に対する真の謝罪の思いと反省の気持ちを導きます。

自分自身の暴力に向き合うために、本音の蓋をはずす作業は男の加害者にとっては容易なものではありません。彼らに少しでも外圧をかけると、その蓋を閉ざしてしまいます。その意味で支援者の粘り強い受容的姿勢は大切であり、支援者自らが彼らの手本となるように接していくことが重要だと考えます。

（平成25年8月29日精神保健懇話会 講演要旨）